

島田正路氏著書「コトタマ学」より抜粋

宝達山(モーゼ氏此所に眠る) 1

その 383

神人、モーゼ・ロミユラス 魂塚

かくの如くエホバの僕（しもべ）モーゼは、エホバの言（ことば）のごとくモアブの地に死ねり

エホバ、ペテパオルに対するモアブの地にこれを葬り給へり

今日までその墓を知る人なし

モーゼはその死にたる時 120 歳なりしが

その目はかすまずその気力は衰えざりき・・・

ヌンの子ヨシュアは心に知恵の充（みて）るものなりモーゼその手をこれが上に按（おき）たるによりて、然るなり

イスラエルの子孫は之に聴（きき）したがひエホバのモーゼに命じたまひし如くおこなへり

イスラエルの中には、この後モーゼの如き預言者おこらざりき

モーゼは、エホバが面（かほ）を対（あわ）せて知りたまへる者なりき・・・」

（旧約聖書申命記第三十四章 5 ～10）

不合朝 六十九出代神足別豊鍬天皇の御代、 即位二百年、イヤヨ月円六日、ヨモツ国よりモーゼ・ロミュラス日本に來たり、十二年間日本に住む、この間にモーゼは万国 五色人の守る十戒の法作る。…

モーゼは、天皇の内親王、大室姫と結婚、7 人の子を生む。

…モーゼ 583 歳にして神幽（かむさ）り 能登宝達山、ネボ谷に葬り、後分塚して越中国、呉羽の安ネボ山に葬る。

大室姫（ローマ姫）は、461 歳にて神幽（かむさ）り給ひ、能登 宝達山に葬る。

（竹内文献、世界の正史、不合六十九代の章）

今年 4 月 5 月 6 月号会報にて世界人類の第二物質科学文明より第三の新文明時代に移る大転換を可能にする唯一の手段である言霊原理による「御祓」についての詳細を明らかにすることが出来たので、その第二物質科学文明創造の責任を負った神選ユダヤ民族の祖であるモーゼ・ロミュラスの墓へ行ってみようという気持ちが筆者に起こったのは 5 月の中旬頃であった。モーゼの墓が能登宝達山にあるということは相当以前から知っていた。けれど殊更にその地足を運ぶという気は起きなかった。ところが今になって、ふとその気が動いたのは、ユダヤの預言者、またはその使姫である金毛九尾霊に対する日本と世界の歴史上必須の「御祓」実行の時が近づいて来たためであろうか。

その 384 につづく

島田正路氏著書「コトタマ学」より抜粋

宝達山(モーゼ氏此所に眠る) 2

その 384

五月二十三日(日)朝 7 時 45 分羽田(東京)空港発家内と共に小松に向かった。その日は快晴で、機内よりアルプスや白山の山々が残雪をいただいている姿がよく見えた。JR 小松駅より金沢駅経由能登半島の七尾駅まで快速列車が走っている。能登半島の根元近くにある宝達駅に着いたのは午前 11 時近くであった。ただ、1 人いる駅員にモーゼの墓を訪ねたが、「知らない」という。駅前のタクシー営業所へ行ったらよく知っていた。「この頃は日本人だけではなく、外国人も来るようになった」という。「他所からお客さんが訪ねて来るのに、土地っ子の私が知らないで恥になるから、最近私もモーゼのことを勉強するようになりました」と言って「モーゼは日本で死んでいる」という新刊本を見せて呉れた。見ると「山根キク著」とある。三十年ほど前、著者の言霊学の師小笠原孝次氏の主催する会議で数回会ったことがある山根キク氏の事を思い出した。

モーゼの墓のあるモーゼパーク入り口までタクシーで 5 分くらいであったろうか。入口はまことに立派に整備されている道標もしっかりしている。東京を出発する前、会員の A 氏 より頂いた案内図によれば、入り口から墓まで上り坂で 10 分から 15 分の所であった。道標に従って日差し強い道を登っていったが、困ったことに道標は入り口だけで道の分岐はいくつかあるが、第二、第三の道標は見当たらない。人通りのない山道で道に迷うのは心細いものである。あっち、こっち行った末に幸、山菜取りに来たという土地ご夫婦にあって、案内してもらうことが出来た。ありがたかった。

モーゼの墓は三つ並んだ直径十数メートルの小山の中の中央にあった、山頂の平坦なところの中央に墓標が建てられている。A 氏の説明書には墓標に向かって右隣の山がモーゼ夫人、大室姫(ローマ姫)の塚、向かって左の山がモーゼ夫妻孫の塚との由、モーゼの墓標を見た。正面に「六芒星 神人モーゼ・ロミュラス魂塚」と記されている。側面を見ると「竹内善宮建立」とある。文通はあるが、ここ二十年ほど会ったことはない竹内氏の姿を思い出した。

筆者は家内と並んで墓標の前に立ち、「高天原成弥栄」三唱し、八拍手をした。言霊学とそれに基づく日本とユダヤと世界の歴史の内容が走馬灯の如く脳裏を横切っていった。

イスラエル王モーゼが三千年余り以前、ここ宝達山麓に葬られたと言ったら、現代の歴史学者を口を揃え、腹を抱えて笑い出すことであろう。けれど、それは彼等の歴史を考える視野があまりにも狭く、自ら精神の底を見つめるのがあまりにも浅いために他ならない。彼らが虚心坦懐、次の二つの点に注目し、彼ら自身の心の中にその内容を自覚するまで反省して行くことができるならば、事は率直に承服承認せざるを得ないことになろう。

その 385 につづく

島田正路氏著書「コトタマ学」より抜粋

宝達山(モーゼ氏此所に眠る)3

その 385

- 一、竹内古文献にいはく、「鵜草葺不合皇朝六十九代神足別豊鍬天皇のイスラエル王モーゼに天津金木を教（おし）う。モーゼの帰るにのぞみ、天皇モーゼに勅（みことのり）して曰く「汝モーゼ、汝一人より他に神なしと知れ」と。「次に旧約聖書に謂う「モーゼ神にいひけるは我イスラエルの子孫の所にゆきて、汝等の祖先達の神我を汝らに遣わしたまふと言わんに彼等もしもしその名はなんと我に謂わばなんと彼らに言うべきや

神モーゼに言いたまひけるは、我は有りて在る者なり。(I am that I am) (出エジプト記第三章十三～十四)

上に挙げた神足別豊鍬天皇のモーゼに与えた勅語「汝モーゼ、汝一人より他に神なしと知れ」と。神がモーゼに答えた神の名「我は有りて在る者なり (I am that I am) 」を単なる理論ではなく、自らの心の中でその意味・内容を証明する行の立場から見ると、その二つの言葉が全く同じ内容であり、しかもその証明は、日本の伝統の学アイウエオ五十音言霊布斗麻邇の原理によってのみ証明され、自覚されることが理解される。これがモーゼの日本来朝が事実である事の第一の証拠である。「汝モーゼ、汝一人より他に神なしと知れ」は人の人たる内容を極め尽くした大真理に立たぬ限り言うことが出来ない言葉なのである。

第二点として、日本の大祓祝詞と旧約聖書の「出エジプト記」と「レビ記」の中の文章が全く同一と思えるほど符合していることである。もっと詳しく言うなら、大祓の中の意味の分からないところ（「国津罪とは」の文章）が旧約の出エジプト

記・レビ記を読めば理解できるように符合しているのだ。あまりによく符号することが、これは偶然ではないことがわかる、読者が実際に両者を見比べてみればなるほど頷くはずである。これがモーゼ来朝の第二の証拠である。

「高天原成弥栄」三唱の後、筆者はモーゼの墓標に静かに語りかけた。皇祖皇宗の言霊布斗麻邇の原理に基づく人類文明創造のご経緯により、あなたとあなた方の子孫であるユダヤ民族に人類の第二物質文明科学の創造とその成果による人類の再統一の業が委託されました。そしてあなた方の世界の人の中核にとなって長いたゆまぬ努力によって物質化学文明は今日見るが如く素晴らしい成果を上げることができました。人類再統一の業も完成間近であります。

一方、あなたが物質文明創造促進のために採用したカバラの原理による弱肉強食の生存競争社会の現出は、地球環境破壊と人心荒廃という公害をも生み出す結果となりました。今こそあなた方に委託された事業は完成の時であります。この時代が今後さらに惰性となって続くならば、人類滅亡の危機を招来するのは必然です。あなたとあなたの子孫の業が

皇祖皇宗の経綸の中にあることを改めて自覚され、その仕事に有終の美を飾られ、その完成を速やかに皇祖皇宗に報告され、人類の新しい第三文明への転換に向かって協力されますよう努力なさいませ。三千余年の長い期間誠にご苦労様でありました。」

墓参りを終え、山を下った宝達駅の復路は田園の道を約 30 分歩くことにした。久しぶりの家内と共に田舎道の散策である。青空の下、はるかに能登最高峰という宝達山の山頂が見える。気持ち良さに、大きく息を吸い込んだ。その瞬間、長かった人類の物質科学文明創造の三千年の探求と苦労が今・此所に凝縮し、一転して新しい第三生命時代へ転換して行く世界のドラマを垣間見たような気持ちになった。五月晴れの風はまことに気持ちが良い。

その夜は羽咋市の千里浜国民休暇村に泊まった。夕食に蟹、海老、イカの大判振る舞いであった。食事を終え、部屋に帰って何気なくテレビのスイッチを入れた。何チャンネルだか知らない。数年前に亡くなっていたノイマン氏指揮でドヴォルザーク作「新世界」交響楽が聞こえてきた。素晴らしい演奏である。四楽章前章を聴いて心地よい眠りに入ったのだった。

その 386 につづく